

(36) 誇り高い死を選ぶ（「或る反時代的人間の偵察行」の36）

病人は「社会の寄生虫」である。「生きる意味」や「生きる権利」がなくなっているのに、「医者や治療に意気地なく頼って生きながらえる」のは、社会において「深い軽蔑」を引き寄せることになる。医者はこの「軽蔑の媒介者」たるべきである。「誇りある仕方でする生きることがもはやできない場合には、誇りある仕方でする死ぬこと」、「自発的に選ばれた死、明るく悦ばしく、子供たちや見守る人たちに囲まれた時宜を得た死」、このような死は、この世を去る当人がまだ「そこに居合わせ、決別し、同時に達成されたものや意欲したものを評価し、人生の総括をする」ことが可能な死である。これらすべてはキリスト教が臨終の時に執り行ってきた「憐れむべきぞっとする喜劇」とは正反対である。キリスト教は死に行く者の「弱さ」につけこんで「良心」を凌辱し、その死に方を悪用して「人間と過去とについての価値判断」をして来たのである。

いわゆる「自然死」の正しい生理学的評価をすることが重要である。「自然死」も結局「不自然死」であり、自殺である。そもそも人間は「自己自身による」のでなければ、他の誰かによって「滅びること」は決してない。ただ、最も軽蔑すべき状況での死がある。それは「不自由な死、時宜を得ない死、臆病者の死」に過ぎない。人間は「生への愛」から「死」を別の仕方です、「自由に、意識的に」、「偶然」や「奇襲」なしに望むべきである。

ショーペンハウアーがしたように単に「意志と表象」とによって「生を否定する」だけではなく、われわれは「もう一歩先へ」進まなければならない。そして、まずはショーペンハウアーを否定しなければならない。厭世主義は極めて感染力は強く、それに感化されることはコレラに罹患するようなものである。ただ、罹患するのはそれに罹るだけの病弱な素質をすでにもっていたからである。厭世主義は、ただ一人のデカダンを増やすものでもない。コレラが猛威を奮った年も、死者の総数は例年と大差がなかったのである。

(37) 衰退する生の結果としての近代道徳（「或る反時代的人間の偵察行」の37）

我々は近代において「より道徳的」になり、「進歩」したと言えるのか。われわれ「近代的人間」は「極めてか弱く、極めて傷つきやすく、何百という気配りを与えたり貰ったり」している。そして、この「軟弱な人間性」によって「思いやりや人助けや相互信頼」において達成された「結束」こそ「積極的進歩」であり、「ルネッサンスの人間」を遥かに越えていると自惚れている。しかし、われわれは「ルネッサンスの状態」に身を置くことはできないし、そこへ思いを致すことすらできない。この「無能ぶり」は「進歩」ではなく、それによって示されているのは「より弱く軟弱な傷つきやすい性質」である。

「敵対的で不信を呼び覚ます本能」を取り除くことが「進歩」であると思われるかもしれないが、それは「生命力の一般的減退」における結果の一つに過ぎない。それは「臆病」、「惨めさ」、「老婆の道徳」と呼ばれる。「もっと満ち足り、もっと浪費的で、もっと満ち溢れる」別様の「生」がある。「習俗の柔和化」が「下降」の一つの結果であるのに対して、「習俗の苛酷さや残忍さ」は「生の過剰」の一結果である。後者の場合には「多くのことが敢行され、多くのことが挑発され、多くのことが浪費される」。ルネッサンスという「浪費的で不運豊

かな時代」こそ「最後の偉大な時代」である。